説教要旨「先延ばされる終末」

イザヤ書　４０章１～１１節
ペテロの手紙Ⅱ　３章８～１３節

核戦争や気候変動、環境破壊などによって人類が滅亡する日までの残り時間を象徴する「終末時計」というものがありますが、それによると『終末』まで残り１００秒だそうです。終末時計が想定する『終末』と、聖書の語る『終末』とは少々意味合いが違っているわけですが、使徒パウロは、『終末』は自分が生きている内に起こることだと考えていたようです。しかしこのパウロが生きている間に、『終末』が到来することはありませんでした。

２０世紀の終わり、『１９９９年に人類が滅びる』なんて大騒ぎがありました。それ以降も、何年何月何日に世界が終わると予言するカルト宗教が度々現れましたが、そのすべてが外れています。このペトロの手紙Ⅱが書かれてから２０００年近くたった今も、『終末』は訪れていません。一体いつになったら、イエス・キリストの再臨と最後の審判、終末の時は訪れるのでしょうか。

この疑問に対して、ペテロの手紙Ⅱは、再臨が遅れているように見えるのは、神様ご自身が忍耐しておられるからだと言うのです。つまり、神は「一人も滅びないでみなが悔い改めるようにと忍耐しておられる」（Ⅱペテロ 3:9）。このままでは滅びるしかないわたしたちの為に、わたしたちが本当に悔い改めて、その日を迎えることができるようにと、先延ばしにしておられるというのです。そうであるならば、もはや『終末』は恐ろしいものではありません。

「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ 3:17）と語られているように、わたしたちの滅びを望んでおられない神様が、忍耐強く、執行猶予を与えて下さっているからです。

この執行猶予の間に、神の愛に応えて、信心深く生きるよう、このペテロの手紙Ⅱは勧めています。それは、「終末なんてこないじゃないか」「神なんていないじゃないか」と、ニヒリズムを決め込むのではなく、それでも神様は確かにわたしを愛して下さっていると、神の愛を受け入れて歩むことなのです。

（２０２１・１２・１２　説教者：稲垣真実）